

を、芸術品ではないと御覽ではないでせうか。僕は芸術品と思ふ、さうなるやうに育て、行かうとしてゐます。従つて、いくら論（になつてゐるかどうか、僕のもの）じたところで、結局無駄ではないかとさへ思ひますが……。

さて、俳句と寸言との味は、似てはをっても全く別です。俳句と寸言とが別物だから、本当は全く別な味ひなんです。アイウエオとカキクケコ、この相似た二行から受ける我等の感じさへ違ひます。七月一日、七月二日、二つ並べてやはり感じの問題になつたら明らかに違ひます。笑はないで下さい。僕はこんな処まで掘下げて行かないと我慢出来ないのです、尠くとも芸術上の事になると……。あなたの（十三行以下八行の）所論はどうも僕にはつきり解らないのです。しかしまさか曲水は俳句雑誌であるから俳句以外のものは一切中止した方がいゝ、といふやうな事は微塵も含まれてはゐないとは察しますが、どうもはつきりわからないのです。正しい意味では、俳句の味は寸言では出せないのです。同時に寸言の味は俳句で出せません。で、あなたの断言は御返却致します、御受取が願ひたいのです。要するに、「俳句に専念なれ云々」があなたの主張と思ひます。けれども、句作者として一生を託する人ならば、それも出来ませうが、さうでない人、一般俳人には少し無理のやうです。やはり自然に、俳句以外のものも人に依つては出てしまふんです。これはどうする事も出来ないのです。俳句の下十二字が出来て、上五字がどうしても出来ません。それでも我々はそれを捨て得ないで、いつまでもノートの片隅に書いて置きはしませんか、二年も三年も未成品でも我々は一つの喜びを持つて保存します。よし寸言がさうした未成品であつても、それを育てやうとするのは結構ではありませんか。また、俳句にのみ専念にならないでも、季題寸言の作者

達は、俳句にのみ専念に携つてゐる他の曲水社友諸君の誰よりも、俳句に怠けてゐるとも、俳句が拙いとも思はれないやうです。（僕は、昨年から少し詩に就て考へてゐるので、何だか俳句について俳人が忘れてゐるものがあるやうな気が頻りにしてゐます。これが解るまで、時々作つていますが、結局怠けています。安心して怠けてゐるのです。念の為。）

最後に、お示しの諸氏の作品、残念ながら僕には寸言と似て全く別だとしかとれませんでした。全部がとれませんでした。少し愕きました。強いて似てゐる点を申せば、字数だけが寸言のあるものに似てゐるだけで、それと、最初の一つが、僅かに少し考へられました。が、寸言ならばこの場合、せめて「今日も」位の文字を上につけます。せめてそれで作者の感情を、もの一字で、作品の中へ吹込みます。兎に角、御指示の全部、寸言として投ぜられたものだったら、没です。寸言としては表現がまるで別物です。内容はどんなものでも、表現がなつてゐなくつてはつまりません。大理石の彫刻でも、それは一つの大理石塊にすぎません。

季題寸言

（曲水改卷9-1）

地震の夜が来た。安じられる弟の帰りを待ちながら、椅子の上の父と、世相が変わるだらうと話した。楓に吊るした提灯の明りどうどんを煮出して食べた。

（秋の夜）

地震の夜、更けて日本橋の勤め先から、藁草履を穿いて戻つて来た弟の話で、朝までには下町一帯が焼けてしまふさうだった。この秋の夜は、亡き東京の夢が多からう。

（秋）